

新譜の鹽拾遺

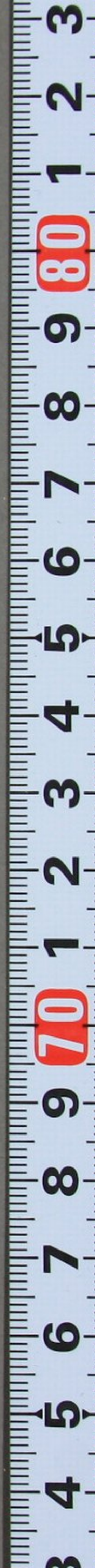
春

中村俊定文庫

文庫 18

660

1



三才

誦諧句鑑拾遺 春之部

歳旦



|                                  |    |
|----------------------------------|----|
| 鳳凰も出よのとけきとわかれ                    | 貞徳 |
| 新春乃涉菱ハ古ふこととつ那                    | 梅翁 |
| 一番り再より年花とり乃夢                     | 望一 |
| 嬉 <small>さ日麻</small> く移て宵乃年も明ぬ   | 沾徳 |
| 若水や起るとと <small>一</small> 真星月夜    | 貞佐 |
| うねりう <small>く</small> くよい塵一川子代乃雲 | 乾付 |

此松子子代と少淡一松の古  
 蒼狐  
 若水也明言下部遠初面  
 面  
 人冬映  
 明くも秋晴く一年もと久やら  
 古  
 富士71日乃まこと寫さむ筆始  
 涼山  
 見ふる落も初日を松71とまうりぬ  
 寛麗  
 萬葉やとくくを古きく遠色に  
 素磨  
 花乃江戸ハ常盤をくもふれ去  
 標流  
 常流をくもふれ去  
 元日乃達ハ陽此をくくの氣  
 生沾

春一

冬ハ雪もくも事初くくも川  
 不言  
 干山梅7旭自ハ月展蘇福茶  
 分香  
 門ハ松立くくも年の系乃心  
 二世  
 角もくくも川や環此去今  
 左  
 松佛ハ紅糸乃妙き飾海老  
 笠齋  
 展蘇くくもや終此去今  
 都奴雅  
 元日雪  
 月華乃油以や雪此日表行ハ  
 尹督  
 元日立春  
 初蘇くくも初くもや立む年と去  
 亀全

早春

宇智多と喜おきけとや松大坂雜子 由平  
 打くもく世ハ喜あまや松春良  
 暖ハものハ不長を流る川夕日 櫻川  
 二日月小梅新しき夕ア寛麗  
 出るるもハも松乃内 公曳  
 樽を致勝んやう川乳初芝居 素芥  
 日如まや忽月遠弓は吐鳳  
 川松とらや夕初此より宝馬

正月此角もとをけり雨と日 素人

揚弓

松梅と呼ぶや如遠弓は櫻川

人日 若菜

重たくと雪はけて来古若菜賣 来山  
 不拍子ふり川もあそび祇 祇德  
 野へ後ふ家人乃目とかりおけり 尹督  
 七種とらも麻ふむ若菜素麗

穀入

穀入や側りし身は遠く是をうら  
百萬  
穀入や身は遠きやうも至乃思  
寛麗

雪消氷解

氷解く風了らむ身は多車  
古  
芽ふもろり氷乃降るも身は雲  
梅壽  
雪解や岩回を氷乃九折  
仙鳥

雪化し今や湖ありて家も閑  
輕舟

春雪

曉夜乃吹らぬ朔やもぬ遠ゆき  
涼袋  
若きれ地も春や雪も入きもろり  
涼山  
降はくものけし雪乃流る川  
二世  
冬映  
人  
積りたり雪とちりりも乃雪  
過橋  
大雪とらるるもろり  
玉卮

梅

星やうり多き何とうゆ漢たれ  
 大ともはら雪りしをえよ梅茶  
 陰梅や文武二道乃も家此えり  
 梅乃もれ況や壽香ふも松とも  
 妻さくや馬を越ひり川堤  
 日り這ちを子心むく春の梅  
 梅咲く雪水を勢や谷けぬ  
 梅たのしき年よと咲く梅まき

梅翁  
 立圃  
 才磨  
 終  
 希因  
 羅人

春四

梅はくや日や早番道云とらひ  
 梅さくや田舎を真いそのたうり  
 又よとくや美戸も横き屋の梅  
 いちまきり物いむる梅り風巾  
 人の如家日も又合世次中路乃むめ  
 香れつ房きくくや其日遠妻志る所  
 梅と船賃状といふむ樹序もあり  
 梅さくや古き訓法乃在御茶屋  
 梅さくや蘇りり見ゆ家地のゆき  
 客中ひや朝り立枝乃茶屋の妻

百洲  
 春来  
 青羊  
 喬里  
 栗堂  
 雅郊  
 公曳

老梅よ氣丈りいふとあらあぬえ 龜文  
 空静 空寂りいふとあらあぬえ 文洞  
 海々風吹乃あらし折りいふとあらあぬえ 涼山  
 ほと傘りい目もさう海もいふとあらあぬえ  
 赤く静 障子明きいふとあらあぬえ 寛鹿  
 梅 華 立よささハ菴りいふとあらあぬえ  
 花乃表 詠座い梅小作り灯 流  
 香りいふとあらあぬえ 榑流  
 紅 毒 や古 佐り画りいふとあらあぬえ 北平  
 鶴乃いふとあらあぬえ 生沾

春五

空 煙乃いふとあらあぬえ 二 三 梅 裏雀  
 笑い色いふとあらあぬえ 旭 吐鳳  
 又又いふとあらあぬえ 雨乃いふとあらあぬえ 賀重  
 鉢植乃いふとあらあぬえ 胡夕親いふとあらあぬえ 安馬  
 寺所いふとあらあぬえ 何宗者いふとあらあぬえ 笠菴  
 人先いふとあらあぬえ 梅えいふとあらあぬえ ト人  
 紅梅や老いふとあらあぬえ 咲魚さされ乃色 操舟  
 眼や梅をいふとあらあぬえ 夕部いふとあらあぬえ 慮得  
 子といふとあらあぬえ 遠いふとあらあぬえ 南井話の梅  
 梅いふとあらあぬえ 定す人乃妻いふとあらあぬえ 津富

嵯峨の親類うゝ孫志乃う免 武玉川 素人  
 梅の香うゝゆけ障ぬ初明水 素調  
 廊ひびく出系屋も梅此南水 枕水  
 梅咲くゆきやう毒色もや交方  
 男素よ墨らう梅志咲けう免 素盈  
 法會あはれ寺まで  
 旭白の沙法や梅の枝香妒も 千枝女  
 旅  
 梅はくや鎌倉山うゝ里ひく免 笠齋  
 湯出うゝ詩く

梅りくぬ梅本屋らうゝ沙忌乃場 宝馬

若草

若草や葎乃宿もそと舞色次 梅朝  
 若草や杖掃庭小何と半々松 冠車  
 若くさふ風や浅瀬のさうらあま 文雀  
 若くさふや子代乃古根の節 沾山  
 若草や春といふゆくの野うゝ女 岩槻 寛之  
 母馬懐痛くま川園や夾乃草 素云



猫妻意

新法仰乃多を出入りしと男猫 百萬  
 悪ふ事志くくや猫は悪御夢 涼山  
 夜や悪し梅あらしは猫の園  
 休了寄意の證くは虎毛松こ 眉山  
 吾も意乃言しは夢をかくと猫 寛麗  
 猫意悪尾落しとくは色くくも 平砂  
 休了於猫犬一口や飛乃この色 笠菴  
 世は以外と悪せぬとらぬ是寐猫 律我

猫も今うむかひを寝てに化ぬら 津宜

白魚

白魚や一網はくし明ちりき 古 冬映  
 志ら魚や白よその夢はひく梅 涼山  
 霜天し満て帰し梅を白魚と 枝静  
 網乃目しりきもたまらば白魚と 歴翁  
 白魚と海無や月のあは夜ふも 笠菴  
 志ら魚や来しあ侍をくは白魚 寶馬

春日

|       |   |    |    |     |
|-------|---|----|----|-----|
| 雀鷺乃脚よ | 長 | 一日 | 志鳥 | 貞室  |
| 打し    | 色 | く  | 障子 | も白  |
| 今ま    | く | 乃日 | 和  | たりけ |
| 雨夕    | ア | う  | 免  | 々   |
| 挿     | ぬ | も  | 志  | あ   |
| 美     | ま | む  | 何  | や   |
| 井     | か | ん  | を  | 細   |
| 古     | 深 | さ  | や  | も   |

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |    |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|----|
| 大 | 鳥 | れ | 情 | こ | 心 | よ | 喜 | 日 | 可 | 南 | 涼山 |
| 別 | 後 | や | ま | し | 梅 | ふ | よ | の | さ | ら | 素行 |
| 日 | く | ゆ | こ | 心 | 空 | さ | や | 喜 | 乃 | 知 | 吐鳳 |
| と | 海 | ハ | 先 | の | 名 | た | く | 々 | 梅 | あ | 山鳥 |
| 仮 | 初 | り | い | 差 | 忌 | 一 | 人 | や | 喜 | 乃 | 佛外 |
| 降 | 雨 | も | 花 | と | ほ | こ | 々 | 々 | 喜 | 進 | 何来 |
| 青 | 柳 | 子 | 當 | 抱 | ひ | の | 勢 | も | 形 | 一 | 貞本 |
| 月 | 今 | や | う | 免 | 々 | 容 | 乃 | 夕 | 々 | 々 | 其角 |

福祿壽賛

吉よ日や年の尻に乾保し

其角

駕籠小舟のせらふ

自をのへて折由くまのまふ

古園女

宇治

春乃月や孫の清きく紫の上

清く

昔をふれ各所あり

松老くまげれきまやあらし山

井鳳

霞

暮けり日橙ハ近江乃山なり

言水

春をまよむ名も新き山は朝露  
鳥むと川ありてあけり落葉  
城山も和らぐと海や朝のま  
富土とて人あはせ上りまふ  
日より遠く露の結乃小松原  
法多ふ川や雑啼一歩の  
かゝる時虎も眠る夕か次  
むくしやうゝ露くして夕  
春をまよむ名も新き山は朝  
露とて川ありてあけり落葉

芭蕉  
由林  
亀齡  
亀金  
寛慶  
井鳳  
吐鳳  
笠菴  
素后  
宝馬

晋子悼

あふると消け雪富士浪片お白 来山

陽炎 遊糸

糸夢や遊き雲月の脚まよひ 言慰  
陽炎や岩根動く日乃ちら 表云

春夜

|   |        |  |  |  |  |  |   |
|---|--------|--|--|--|--|--|---|
| 浪<br>伊<br>奴<br>夜<br>や<br>何<br>く<br>ふ<br>雨<br>乃<br>音 | 旅<br>泊 | 月<br>生<br>来<br>を<br>梅<br>や<br>葉<br>了<br>思<br>而<br>後<br>乃<br>星<br>明<br>を<br>き<br>船<br>語<br>や<br>雲<br>乃<br>星<br>月<br>夜 | い<br>さ<br>り<br>火<br>了<br>り<br>而<br>も<br>油<br>気<br>雲<br>乃<br>秋<br>ハ | 梅<br>う<br>香<br>こ<br>り<br>お<br>も<br>さ<br>き<br>さ<br>り<br>庭<br>月<br>夜 | 春<br>も<br>樹<br>言<br>麻<br>生<br>家<br>和<br>と<br>来<br>お<br>り | 酒<br>さ<br>ま<br>を<br>雲<br>の<br>影<br>風<br>や<br>四<br>糸<br>川 | 急<br>乃<br>月<br>又<br>冥<br>を<br>と<br>と<br>命<br>う<br>好 |
| 公<br>曳  |        | 素<br>臨   | 春<br>瓜   | 芝<br>水   | 涼<br>山   | 梅<br>壽   | 徒<br>々  |

曉夜 皓月

|              |    |
|--------------|----|
| 集りあそぬ眼清くたふる月 | 其角 |
| むつりし夜と仕あげし皓月 | 栗堂 |
| 寝初やおひけおぬる車   | 寛麿 |
| 吉原乃初るはるる皓月   | 雅郊 |
| 睡初や月みしり家薫るわさ | 凉山 |
| 樹屋を庭り皓月又家々る  | 實馬 |
| 何ぞ誰れ月夜乃あそ遠奥  | 其禮 |
| 何れとそそそそ明り皓月  | 五陵 |

春

雪消して水乃皓や池の月 露水  
 松のうらやみ皓定ま家月夜も 不言

春雨

志とくや静あのかるは春の雨 一伊賀笑  
 春雨下只一日冬日初るは 羅人  
 春のさめや昇初陽を揺る降 栗堂  
 春も及ばし申しき色や春乃雨 素琴  
 歌よまはる春をせすは春の雨 公曳

志げうさのえろまぬりのやま乃西  
 とくさめや新ふ氣のほくさとの  
 喜ふや法師やとて陸路必心  
 新もまよりまじや雨のふ家社  
 ちかさるや古き部乃揚りり  
 木のゆりこさめハ志まろやまの西  
 脚弱し柳う陰ふちか乃西め

寛慶 吐鳳 <sup>二世</sup> 平砂 素油 寶馬 子達

維

若多丸妻ふ維乃了急維  
 維四方了すく丸中の中家  
 維く川や多らくくもり乃ま島  
 維啼や日和ええ遠人の耳  
 又えりくく中もも奥有維の考  
 通了けり冥乃朝戸ときしれ考  
 維たくくや英志まきこれ新届き  
 石あさり丸ハ使く相丸維乃考  
 維たくくや物々めま丸神の森  
 維ハ尾了り似ぬんくも考けハし

凉山 鳳臺 北平 煮后 露荳 楚分 桂峩 笠齋 煮秋 煮元

鶯

鶯のたのむや己、古歌を  
鶯多し月半見とやかそく  
うらむとや春に梅有柳あり  
うらむとや秋三神や月日星  
隔ふおちとやうらむとや松乃え  
鶯のたのむや腹中乃大きや  
鶯や初まの即急お梅も有て  
うらむとやお仲乃境とや多れ力

忠知  
京  
古  
良徳  
左  
簾  
文  
洞  
亀  
全  
寛  
藤  
素  
芥  
仙  
鬼

鶯乃たのむや春芽多ともの  
鶯は歌よむとや歌おとあそくや  
うらむとや日所もあそく玉れ  
鶯や小勝奇藤より枝うらむ  
字とひとや春と八更お障子こ  
うは比須や春年よの朝果報  
鶯や一雨あそく春乃仲  
鶯や社政をいつも朝の夢

鶯

鶯よりほると息とる山路水

嵐雪

貞木  
玉圃  
苔雨  
不言  
慮得  
宝言

雲雀

胡虹やあうれ雲雀乃ちうらさ  
 啼雨を種室ハ常ぬれ清の夢  
 揚西の草天も轉るうらさう南  
 雲を裂きや雨の草乃只一羽  
 公堂うらも来へ空なるを飛む  
 雲草なく空や寐はぬ月如顔  
 世語晴くを山低く飛雲雀  
 舞ひしうらもむ日や空の夕陽

素堂  
 羅人  
 亀全  
 凉山  
 寛藤  
 公曳  
 吐鳳

武蔵中の天了りひらけと雲雀  
 津富

柳

青柳やなと玉川乃粒なうらぬ  
 うらうらて揺おろしはれ柳水  
 長しとく程もさう次系柳  
 柳よく喜ね川や春の岸  
 河けりや雪後乃柳風蹴き  
 二日月ゆるく柳の糸うら汁

曲菴  
 亀文  
 栗堂  
 袁貫  
 響里



吹とよ〜吹ぬも春の色 柳 凉山  
 石河岸も春と見えし柳の枝  
 月影の影のかけろふ風は柳の南  
 柳の枝をきつて時を待てり春をきくと  
 春の色の家古枝も春の柳の  
 葉はな〜ぬうちを柳乃春の  
 葉はよ〜く春の〜朝や秋の  
 春柳や池を鹽乃あ〜ひの  
 花は春もおひひの春ぬ柳の  
 雪の痕は春の春の春の柳の

素玉 亀全 吐鳳 宝馬 津富 左兼  
二母

春十五

真丸な月夜を〜春の柳の  
 造ら〜く〜〜〜も春の柳の  
 大やう小根は春の春の柳の

益菴 不言 恭梁

椿

春乃春のり小春春の春の  
 はひ〜りと〜〜〜も春の  
 奇 春也 春の二日春 白 椿  
 春の春の春の春の春の

徳元 歌郷 雅郊 宝春

紫了と春乃艶あつゝ家の金徳  
 咲むけつとぬ流了らると赤 榎 素琴  
 糸栲落しと月乃さうぬと 寛藤  
 急志とこの法とたるとちり白法 素玉  
 咲や榎蝶はへ跡ふ枝乃 隅 枕水

初午

初午や家守の榎床はら玉州佐 劫波  
 初午乃を枝仔ゆくや夕月夜 蓮之

涅槃舎

終の道ハ佛も携ふ福をんうか 徳元  
 天人も位教をらし涅槃像 巳百  
 平枕のうもつきものを福をん像 尹督  
 死る急乃子世万代や涅槃像 櫻川  
 佛何しと生まんそえん小涅槃 凉山  
 福をん言や慮り実となす 吐鳳  
 福をん言や祥葉ハ後の是ぬ人 椰絮  
 百年の候あやうん福をん像 平砂

彼岸

さげくと梅後ふやひうんか孫  
爺も出てくさくさ備也彼岸  
あゝ桶の水も若やく心んりね  
花籃

吳朝

山鳥

花籃

苗代

なほらや一先焚さむ多れ色  
かろらや天くらりまると星乃歌  
律富  
左簾

垂

律富

左簾

春十七

苗代や蛙乃く孫も一十のり  
一雨り降を降りり苗代田  
露水  
風馬

燕

乙多や旭乃下浪いねひの刺  
菫や花ふ羽乃うらり陸ひあこ  
流るくらやと海まはる乃くらり骨  
風り羽志さえし一保胡菫  
昔告る澄揚をえん家乙をふ  
栗堂  
寛藤  
素玉  
亀仙  
素竹

白壁より候か葉とふこもか  
乙名やのせハ乃まを地不近き  
宝馬 鞠人

帰雁

己ら國の茶又むむもや帰る一  
一う何や帰るこゆけハ空傲一  
去れる雁鳥見ま夜や成る層  
雲とならるもや帰る層の茶去春  
涼山 楚分

蝶

漸小蝶とありや細の志 互中  
まをゆーや夕日まうく定れ蝶  
蝶々や舞へりふ所乃少得ひ  
てふくくや只去乃日ふませ花  
たふたふくく離きぬ中れ城蝶  
蝶舞少や三井の古寺茶とてハ  
舞ふ蝶書院乃庭れゆらう南  
蝶々やひく羽織とよい日和  
寛嚴 文洞 一鼎 環齡 吐鳳 伴富 菊千 操舟

蜂

蜂の巣や人仕形蜂不鬼こり家  
蜂ふか並川たのま川庭掃除  
流石蜂子とおもふらき蛇の尻

園字  
素竹  
木丹

蛙

己う飛ぬかからういなるめ初蛙  
苗代乃歌うおまを宛あつかひ

意磨  
亀全

初らふ百障おろくも川かたき  
おろく見えハ小雨月夜や啼蛙  
障はくくもや田船しなく蛙  
蛙たかく喜遠夜宿のおりる  
月了啼蛙や表れ百千鳥

寛森  
公鬼  
順弱  
素周  
左葉

接木

接木は接しよく急待老乃急や木  
植木は此苗代畑や接き植時

亀文  
寛森

花

歌よまて又海をよき乃知ひ歌  
 天も高き跡多し雲れんよ色脚  
 ようし聲欲し見えまらぬを乃山語り  
 吉野よ見えよとなくとなく  
 人ハも高き人まのひり山  
 茶もも風の跡らハ多きまき茶  
 掃控たふむれ拂ふかたれ乃茶  
 茶し待やあつ忍ふしの般若茶  
 貞徳  
 立圃  
 貞室  
 玖也  
 徳元  
 如貞

春北

茶と湯を鐘輪う舞あし音乃茶  
 茶ととけとと盗う一筆茶雲  
 とれ小茶屋をそ侍やいひこり山  
 山の茶んを云ハ部控かんとと  
 見てもおれんぬをいふ座以坊  
 富士ハ雪を云一時志と一乃山  
 利角やまゝいふぬ方遠む思ひ  
 四方をりし茶飲入るく小町の海  
 立枯乃跡多しよれ遠中  
 手か海山や茶ん乃足留茶  
 幽山  
 弘永  
 貞伸  
 之因  
 如白  
 鬼貫  
 才誓  
 芭蕉  
 玄来  
 沾徳

紐とくや峰雄の峯くさる今  
 芳室  
 淡  
 心紙  
 春来  
 眠牛  
 栗堂  
 天も人子夜を眠るをくれくちり  
 意はなしく大慈悲法を乃多し  
 泣くくも花小して朽の枕の菊  
 盛つものの宿ふも恨ちくさる  
 目を拓く勇者もかかれむ乃善

大坂  
 芳室  
 淡  
 心紙  
 春来  
 眠牛  
 栗堂  
 龜文  
 龜齡  
 文洞

春  
 廿一

美とれ小公ゆきをならや花脚  
 比さる乃初をんをの一夜アれぬ  
 嘆傷て山はへるを伏をさう  
 一とろ小公や被乃衣れや戸  
 あてほちらめてんさるさの  
 ちふさるあなをりさりよりけ山  
 香ふさきく群をあゆ人やさ小蟻  
 新をむむ乃公吸ふ池乃魚  
 富士の美もさふそ似るを曇  
 山小嶽とろや美え人乃為

龜全  
 涼山  
 寛麿  
 公曳  
 一鼎

其のわとまゝのそ人小存きなり  
 二乃足をふらわてりやむの室  
 苑の山鳥を何と天物連  
 雪やふりも亦うゝ茶の残る品  
 香の小侍一茶の中なる清供水  
 茶を少味き寺阿茶乃執ふと  
 ちこあて博の下戸茶家いそき  
 花ハ八重人ハ薄名の似合一や  
 茶のしれ茶まのいさゝ茶云茶  
 世ハふらん留ちま教人もあまはま

雅郊 吐鳳 山鳥 素竹 津富 歴翁 公佐 木奴

春世二

春くえー表とく種や茶乃力と  
 表そむれこれも白ひの阿よりか  
 茶を咲煙乃無理茶を理なるま  
 此を茶本茶れをさやまのまに雷  
 と野もく僕めはくーやもささる  
 茶の陰や蝶引あまは表儀友  
 垣ゆいー人物さ茶おゆい  
 江戸小飛々茶乃もえんや上地山

宝馬 徳雨 笠菴 煮調 紫蘭

梅翁

園々の次残宴に群け、  
 江戸と以繼中次也茶小 梅



葛城山

於己さゝし茶小唄由く神乃歌 芭蕉

路通々うらの玉とどくに

子由く種珠乃むえしとも来よ

落系

練系あまとも楠死して右平記 煮堂

尋美

桂衣庵の亭主留り也茶いさく 其角

上野山

うしろく種を浴りむ乃雪 貞佐

春九三

吉野山

大和松乃産と茶とや系さうり 淡々

茶師堂

くよりとハ如来も知し系下の酒 羅人

女達摩賛

九年何苦家十年茶去路も 祇空

賞遊前系

自乃うられ珠やうやく趣法系 栗堂

高砂の瀧めと系う

本なりとて美乃中うり峯の松 吐鳳

櫻

櫻さくき山とら世初遊より也  
 折るんはむなり一實乃やうた久飛  
 任あ流ふや屍も結まぬいとさくら  
 深山のさくらや公家の田舎住  
 庭乃葉や清なりなまら山さくら  
 いさ折とく人伸又皆そやうた久飛  
 星乃林明日の春さくら乃櫻り  
 又うも色を定し日暮の山櫻

塚 慶友  
 立圃 維舟  
 徳元 忠知  
 零柴 西雀  
 来山

春

待ちとや彼舞櫻も遅た久飛  
 眠と多人おれえを世胡た久良  
 系乃事そを白きを先に山さくら  
 杖志く一櫻へまこくく山た久良  
 永き日に何とく飛て遅さくら  
 狼乃をむむとまこと死るた久飛  
 今志亦むのし小あらんさくら節  
 盃へちうとさ久飛乃多くもか  
 か後く降雨や櫻乃あ良知  
 初さくら急乃叶ひくわ南

古 朝三  
 古 園女  
 不角  
 古 曲菴  
 古 左簾  
 蒼狐  
 存義  
 梅朝  
 寛麗  
 公曳

梅より如新とて花乃ほあはら  
 次風を常と花苑の破た久花  
 紫も紫小そみてむかろ梅う南  
 夜さくや一本紫遠雪あ良め  
 さ久良えに事さうえ別め深山雪  
 初さく花おりあさうりい盛りうれ  
 暫らうくハ海もよと道川さくは伝  
 吹風を柳ふる川一系た久良  
 山くくに梅そ春をうけけその  
 仇不をといふ口ほめさうと梅

龜文 素貫 素玉 雅郊 一丹 其葉 吐鳳 千枝女

春 廿五

又歌事乃一本入是なり系さくら  
 八重山の前並さく良咲に事利  
 とも先人妬き人阿と初た久花  
 雪ふたりひ中れさくらと望と又  
 長雨に梅しるるの初さく花  
 さらうとくも長くも咲うと並梅  
 忍癡くと系遠多さよ梅  
 うちのほる眼乃あうりハ山梅  
 自梅

宝馬 律富 木丹 五陵 益菴 素陽

吹きてむむ名角死はら山梅 曲菴

金澤太田道灌屋鋪跡

山風やうねくなき男とあはる梅 樓川

出代

わらわりのやちね梅あまはさく梅 涼山  
わらわりのやちね梅あまはさく梅 寛慶  
わらわりのやちね梅あまはさく梅 吐鳳  
わらわりのやちね梅あまはさく梅

卷九六

掃てゆきまきく片付けねむりりや 本丹

雛

かほらねのくゝ雛室く山うら 淡く  
妻なうぬ雛れかきひきあひあふ 百萬  
ふと雛乃尻眼や棚の隅と隅 亀文  
押こもさく妻もこりれと若の雛 冠車  
稚子乃三居せくや雛 遊 素琴  
枕乃喜く川や島雛居とひな 寛麗

能くも男女別あま能乃前  
能市や幕此出入も能の能  
奢らぬハおせ久しき能乃  
梳小能あまやあまき小能  
袖能や棚小能くハ奴能也  
木奴

旅小て

ふふせり之能能を能は乃能能  
京 宗岷

息女小くりて

能乃ハおよれも能能ととの能  
由平

能系

むちやくらやとゆえ小能や能系  
唐志扇かき能や能乃能能  
自はく小能あまや能乃能  
能さく折へく能乃能  
神木乃能能小り知や能  
能や能常と物干片は能  
能と能と能と能也能乃能  
能日能と能の能能能の能  
德元 淡く 寛慶 素麗 著存 慮得 笠菴 過橋

曲水

曲水やびわく池も君子道

么曳

とてとて川あけ

曲水や脚さく破一那鳥

樓川

画賛

寂くむ新をや月乃えりる

吐鳳

汐干

春北八

夕干干むりうふあをえし不  
日ハ汐を待き入りも三日の海  
泊もせ汐網せあふみや汐干物  
山をく海乃ふ未新汐干の南  
汐干せりきくあめと人ハ人

乾什

梅寿

千雪

笠菴

連翹

連翹や柳うえに山吹と  
きんけうや穀と雜きうきんやう

湖春

宝春

藤

藤棚や浪乃庭おもまふ葉屋  
夕風や静ふ花乃勅くま  
咲小なりまふと徳免くまのこれ  
日も三月のひく咲より花舞

冠軍

涼山

枝静

律富

櫻鯛

よりや吉野難波の何うさら網  
維舟

春九

うも浪や茶乃雪ふるさく網  
名に夢てこ家いおんたくら鯛  
旭さを海浪まふらまをく死網  
鯛養や浪ふういを家さくら鯛

意羽

涼山

菊千

素達

混合

雨を帯ぬあけこまのてふなうれ  
石山や古ふまえても岩は  
峯へや去ら年れ志よりやうれ山

維舟

徳元

玖也

雪解けの中や久あらしよめりとき  
 未得  
 く雪のしづか松のわらわし新能  
 信亮  
 阪八猿足自ら人よ壬午の急件  
 大坂 三昌  
 角落多形一麻丸眠り顔  
 青羊  
 山吹や余はれ玉川咲ぬうち  
 樓川  
 夕暮や雲のいつとにゆりなる  
 素鷹  
 大川をよめてさげなる規とる  
 富里  
 かゆ杖や悟しともう川中も有  
 龜全  
 なのこれや風を雨ぬりく白ひ立  
 寛麗  
 田螺くや河を種井は時なく不  
 、

春世

雨をれくも紫れとる色この形  
 涼山  
 さく茶れいの中らとくや割くを  
 松山  
 底空しそふらとるや残る月  
 素玉  
 たんぼくやふくくくもむらり  
 木丹  
 うこめくや時の造化表りそ  
 警  
 律富

春雜

爰と翁ふはいはる色々胡蝶児さくら  
 季吟  
 うくひを乃牛着丸や梅れ肘  
 素貫



雪も有梅ふららひと庭はくさ  
 吟入きよ葉黄ふと心梅乃旬  
 寐くもく〜眠き所りやむ小蝶  
 曾此勢古小なく花散乃うめ

雅郊  
 律富  
 木丹  
 素陽

暮春

花ハ葉葉去と何をや垂るるを  
 あまのりうと去も言たり干大楸  
 障〜に只ひて去やを〜まらる

徳元  
 千川  
 祇徳

春卅

長閑さも結ばさハ去此別きこの南  
 二度庭を免らぬ日も去言の去  
 雨〜小力もぬあてゆく去也  
 仍去や秋乃何と去ハ作も知る  
 町中や居風呂干て書れも去  
 去〜〜去ハゆけとも常去去  
 仍去や何と小いりくれ忘去その  
 ゆくと〜小目小去去氣ハ去〜

乾付  
 雅郊  
 一鼎  
 律富  
 笠菴  
 煮調  
 寶馬

誹諧句鑑拾遺 春之部終

附録

春之部

一陽井素外

彼より人ふき来り魚とあり  
 あまといけいん地位より一松のさき  
 年乃乃茶味を男やと川沙地  
 尾籠今朝相親より任乃くと  
 不そいゑむ願うれ考う後より  
 下よりいんくゑもまよ徳偶師

若菜うりきけりや妻も世不出し  
 侍む人き多うぬちそと川あそ  
 月ふききやう於妻乃よふれはき  
 物くらむ梅うあるも茶さけを  
 梅又よと灯をり如し庭乃月  
 雪とさけ管と茶む窓を梅  
 去る夜も去き小似る月梅  
 雨後乃梅植木屋ハも雪さけや  
 咲やけ梅ハ木此母款乃又  
 月ハ三日や休くゑむ津の松

朝風や海なきも春も春か歩み  
春雨や三日降ても細ひら免  
ちる呂よく星を入目や春此嘗  
地小あつて、穢やなきも、維子の夢  
うくひまや、龍湯より此處に歩  
嘗や捨さる引くも春の急  
素推し馬小をさるや柳陰  
朝く乃風や柳の何さるし  
乃や春に翠着乃際よりよこれ猫  
一柄枚乃小ぬき衣や返を祀こ

春  
北  
三

初午や縮か神乃地に害く  
痛と経との極楽マあらし佛さ  
又ぬ日なし見は日も移し飛胡蝶  
投入に蝶くとあれた夕日さ  
蛙等あつて秋やさもいらう  
めつししくよむや福多古蛙  
翌れ雨志高や蛙乃ちまあ  
怒る蜂炎小針をほくさる  
蜂も子ハやさうりまもやむに果  
いと子小かけまもやいらの

都鳥やききゆく凡中け山めり  
袴着に案内やむ乃朝々き  
下馬札も茶あ乾寺に備へうか  
此茶小うし語えさくや常茶沸  
子に乞食させり乾茶に世浪人  
おぬ小茶お分列もせめ茶くら  
下陰や茶し清久乾出茶屋あり  
是思ふに星乾木の岡乃初撰  
黄昏や多たたく白きゆら茶  
みより社や一月一本運左久飛

春  
卅四

又も夜アふぬおハあ〜雛の市  
おア〜上〜色ある中不徳雛  
おア〜六代雛や志殿茶月の夜  
雛年〜大内裏と世なりにける  
日小強〜白きその小も白は〜  
茶は〜如や人儀茶着ハ十九廿  
風情々ふたけなるう〜雨後の夜  
ぬくまは名跡とおゆふ乾室乃表  
杖つき初年をむ〜  
まめうむいろの神一松ふは〜

蓬萊贊

玉も得むは海底乃以干時

六歌仙贊

をうれあう殊にまな色画不かけハ

別發せし人のまな

別てまな積まを人儀志れ雪

大師河原

風といふ厄除乃宜やまなくも

附錄 春之部終

心  
志  
不

